教区、県仏教会が共催　熊本別院で営む

熊本地震七回忌追悼法要

「いつ何が起こるかわからない。今できることを」

熊本別院（熊本市中央区）で4月6日午後、平成28年熊本地震物故者七回忌追悼法要が営まれた（写真）。熊本教区と熊本県仏教会の共催。遺族や門信徒、僧侶など50人が参拝した。本山からは池田行信総務と晨利信社会部長が列席した。法要の様子はインターネットで生配信した。

平成28年熊本地震では、ともに最大震度7を記録した4月14日の前震と16日の本震などにより、熊本教区内の241カ寺が被災し、門信徒33人が亡くなっている。

法要のはじめに挨拶に立った池田行信総務は、「宗門として、本日ご参拝いただいた熊本県仏教会の皆さまと手を携え、被災された方々の悲しみ、苦悩に寄り添っていきたい。そして、再建途中にあるご寺院の1日も早い復興に向けて、引き続きできる限りの支援をしていきたい」と語った。阿弥陀経をおつとめする中、参拝者が焼香。布教使の甲斐孝文さんが法話した。

熊本県阿蘇市から参拝した満徳寺門徒の大和卓也さん(63)と妻の忍さん(54)は、21歳の大学生だった次男・晃さんを地震で亡くした。晃さんは、熊本市内で被災した友人に食料を届けた帰路、本震で起きた土砂崩れに遭って亡くなった。

卓也さんは「残念しかない。生きていたら今は28歳で、結婚もして孫もいたかも知れない。就職もしているだろう」と目頭を押さえた。また、「晃は大学生になってもうちの農作業を手伝ってくれるような優しい子だった。本当にいつ何が起こるかわからない。もっと親子の会話をしておけばよかった…。皆さんには、親子で常日頃から声を掛け合って、どんな些細なことでもいいから話す時間を作ってほしい。今できることをしてほしい。それが今の私たちに伝えられること」と思いを語った。

被災寺院4カ寺を視察

「完全復興には遠い」

4月6日午前には、池田行信総務、晨利信社会部長、大辻子順紀熊本教区教務所長が、熊本教区内の被災寺院4カ寺を視察し、住職や家族から現在の復興状況などの聞き取りを行った（写真）。

訪問したのは、熊本市中央区・新公寺（清水谷篤仁住職）、同市西区・常通寺（津野田頼勝住職）、益城町・浄信寺（小田孝道住職）、同・専壽寺（高千穂義静住職）。4カ寺はすべて、本堂・庫裏が全壊の判定を受けた。

新公寺と専壽寺は、平成31年3月に本堂・庫裏の新築が完了している。

常通寺は、外陣修復は終えているが、本堂の後ろ壁・屋根は震災当時のままで、修復の目途は立っていない。

山門と鐘楼も全壊した浄信寺は、令和2年4月に鐘楼と本堂、庫裏は完成したものの、町の重要文化財に指定されている山門は現在も修復中。

3月に住職を継職した浄信寺の小田住職は「ご門徒の方々の多くが被災されており、まだまだ完全復興には遠い。ご門徒の方々も苦しいにもかかわらず、多くのご支援をいただいた。2年前に新たな本堂が完成したが、コロナで落慶法要はまだできていない。心の中で一区切りつけたいというご門徒は多く、1日でも早く法要をおつとめしたい」と現状を話した。